口演童話家たちが制作したラジオ初期の番組

―東京放送童話研究会の台本、1934–1939 年―

中村　美和子*

Radio Programmes for Children Produced by Japanese-Style Storytellers:

Scripts of the Tokyo Society for Radio Storytelling for Children, 1934–1939

Miwako NAKAMURA

Abstract

Japanese-style storytellers produced many programmes for children in the early days of radio. This historical study aims to clarify how those programmes were created by the storytellers, focusing on the activities of the Tokyo Society for Radio Storytelling for Children. The society was organised in 1931 by Isoji Sekiya (1902–1984), a storyteller and a staff member of JOAK, Japan's oldest public broadcasting radio station. Through an investigation of some of the society's materials and records of the JOAK programme schedule, the following results were obtained. Firstly, the society's story programmes were aired in the style of radio plays, and their contents were classic masterpieces as well as stories of heroes and giants. Secondly, there were initially thirty-three members in the society, with other members joining within the first few years. Some leading members of the society became leaders of Nippon Shokokumin Bunka Kyokai, a Japanese propaganda agency for children during the Asia–Pacific War (1941–1945). Finally, the following characteristics in the dramatized scripts were identified:

(1) they recreated names and scenes to make children's stories easily understood (especially in the case of foreign classic masterpieces and the lives of heroes and giants);
(2) they reflected the intention to help children learn something; and
(3) they advocated loyalty to the emperor and one's parents; nationalism; and having a honest nature.

Keywords: radio, storytelling, children, scripts, JOAK

1　はじめに

（1）草創期のラジオ番組と口演童話家のかかわり

1925 年 7 月 12 日、ラジオの本放送が JOAK（東京放送局）で開始され[1]、午後に口演童話の大家、久留島武彦（1874–1960）が「貰った寿命」[2]を語った。この放送は『NHK 確定番組』[3]に番組名「童話」と記

キーワード：ラジオ、童話の語り、子ども、台本、JOAK
* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

録されている[4]。久留島以降、口演童話家の出演はくり返された[5]。童話のほか、子ども向け番組には専門家のお話、童謡・唱歌・楽器演奏など音楽もあった。翌 1926 年 9 月からは JOAK で「子供の時間」、1927 年 5 月には JOBK（大阪放送局）で「幼児の時間」が決まった時間帯の枠となり[6]、ラジオの子ども番組は定着化した。

口演童話とは明治期半ばすぎに発祥した日本型ストーリーテリングで、「児童文化の代表的な形で普及してきた」[7]と言われる。聴衆の規模の大きさ、話を補完するジェスチャーなど「大衆童話が研究され、その話し方が定型化し固定化してしまって」[8]専門的職能者を輩出した。ラジオ放送開始前の口演童話は「児童出版以上のマス・コミュニケーション機能を発揮した」[9]と評価される。だが、その一方で、JOAK に 1925 年入局の関屋五十二（1902–1984）によれば、自称者もふくめ東京じゅうに 2,000 人いると噂された童話家たちのなかからラジオに出演した者もいて「童話家の信用を失墜したばかりか、日本中の子供達を童話から引離して行った」[10]状況も呈したという。

久留島主宰の話し方研究会「回字会」に参加していた関屋は、世間に知られた童話家たちに声がけし 1931 年、東京放送童話研究会（以下「東京放童研」）を立ちあげ放送童話の研究を始める。そのテーマのひとつが東西の名作物語で、成果は 1934 年 1 月より 2 年間、毎月 2 日間ないし 4 日間、午後 6 時から 20 分間ずつ「子供の時間」枠内で番組化された。さらに 1935 年には『ラジオ世界名作物語』（清和書店）の出版が企画され、聴く童話から読む童話への改変をともない、全 3 巻に 10 作品所収で刊行の運びとなった[11]。

JOAK では草創期の子ども番組に専任が存在せず、1927 年ごろに初めて係ができ、1928 年に設置された社会教育課で子ども係が 2 名ほど決められた[12]。青山学院高等部時代から口演活動に熱心であった関屋[13]が口演童話家たちとの連絡役を務めたことは明らかであるため、JOAK の初の子ども番組係、社会教育課子ども係の 1 名が関屋を指すと考えられる。このことから、関屋が童話の番組にどう取り組んだか、関屋の業務で一定の部分を占めていたと推察される東京放童研がどのような団体であったかといった点は、子ども番組形成の一部として教育文化史、メディア史、児童文化史など複数の視角から解明が求められると言える。なぜなら、「ラジオを通じて子供に聞かせる話は、全べて放送童話だと云うことも出来よう。しかし、そんな呑気なことを考えているわけにはいかない」[14]と述べた関屋の仕事には、諸分野の専門家による話、音楽家の演奏などを単に電波に乗せる業務から一歩進んだ、子どもたちへの教育意識を感じさせる番組制作企画への移行が認められるからである。しかしながら先行研究では、関屋の人物紹介であっても、ラジオとのかかわりは「子供の時間」内のコーナー「子供の新聞」を 1932 年から村岡花子（1893–1968）と隔週交替で務めた記述が中心である[15]。また東京放童研という団体に関しては、『ラジオ子供のテキスト』の研究[16]、『日本口演童話史』（文化書房博文社、1972 年）中に名称が登場しても、会の構成や展開など具体的なところは記述されていない。東京放童研の活動記録、周年記念誌、関係者の回想録といった文献の存在は確認できず、関連史料の発見が待たれる状況にある。

以上を踏まえ、本研究では『NHK 確定番組』、現存する東京放童研の 35 作品[17]の放送童話台本、上述の図書『ラジオ世界名作物語』全 3 巻を手がかりに、同会の番組が開始された 1934 年から、台本の残る 1939 年に至るまでの展開、制作実績といった会の概要をつかむことを課題とする。加えて、台本については注目される脚色例を挙げながら、同会による放送童話を通した教育的な働きかけのありようを描述する。

(2) 「子供の時間」に関する研究

前節では、関屋五十二と東京放童研に関する先行研究にふれた。ここではラジオ番組「子供の時間」関連の研究を押さえ、本研究の意義をより明らかにする。

ラジオの子ども番組は当初、家庭にいる子どもを対象に提供され、1933 年 9 月になって JOBK において教室での利用を想定した学校放送が開始された[18]。学校放送の始まる前から、JOBK には足立勤という子ども番組の担当者がいた。足立については、放送童話のみならず関西の児童文化全般への功績に関する研究成果が重ねられている[19]。先述の通り関屋の JOAK 入局は 1925 年だが、足立は 1926 年に「子供の時間」

担当として JOBK に入局した。入局前の足立は東京におり、関屋と同じく回字会に参加していた[20]。したがって、本研究を契機として関屋と東京放童研の調査が進めば、JOBK との比較において子ども番組の形成史を論じていけよう。

さて、草創期の子ども番組研究の基本図書としては『ラジオが語る子どもたちの昭和史』全 3 巻（大空社、1992 年）が挙げられる。同書には『ラジオ子供のテキスト』[21]の 1928 年 11 月号から 1941 年 4 月号と継続誌『ラジオ少国民』の記事の一部が復刻収録され、テーマ別の解説が加えられている。編著者の秋山は「日本の子供の昭和史のなかで、放送児童文化に関する部分だけが欠落し、空白になったまま」[22]という問題意識から、ラジオが果たした役割の検討を目的とした。秋山は「子供の時間」に口演童話家が協力した点、また、番組が諸団体[23]に支えられた点を指摘したが、各点の具体的な記述には踏み込まなかった。そこで本研究では、ラジオ・テキスト以外の史料を用いて初期の「子供の時間」で童話番組がどうつくられたのかを探り、秋山が指摘した空隙を埋めることに貢献したい。

2　東京放送童話研究会による放送童話作品

『NHK 確定番組』によって東京放童研担当の番組を確認し、表 1「東京放送童話研究会による『子供の時間』枠内の放送童話一覧」に整理した[24]。また、史料とした放送童話台本の概要も加えた。

『ラジオ世界名作物語』（清和書店、1935 年）序文に記された通り、1934 年 1 月から 2 年間は毎月 2 日間から 4 日間、シリーズ「名作物語」の 1 作品が午後 6 時から「子供の時間」内の 20 分枠で東京放童研の研究成果として放送された。同会は脚色、出演を担当した。つづく 1936 年からは同形式で「偉人物語」、1937 年より「近世日本の英傑」、1938 年より「世界偉人伝」が開始された。

三つの伝記シリーズのあと、1939 年からはシリーズ「世界の名作から」が始まる。そのうち 10 作品は、1934 年からの「名作物語」ですでに一度取り上げられたものである。ただし、一度めは 3 日間もしくは 4 日間の放送だったが、「世界の名作から」では放送日が各 2 日間と短い。『NHK 確定番組』で 1934 年から 1935 年の「子供の時間」欄を確認したところ、劇形式の童話の前に解説のある回が複数存在した[25]。1939 年「世界の名作から」では、時間短縮の方法のひとつとして解説が割愛されたことが考えられる。

さらに、1934 年からの「名作物語」と 1939 年「世界の名作から」には、放送時間とは別の違いもある。それは脚色者から団体名「東京放送童話研究会」が消え、1939 年 5 月から三村良輔、道明真治郎、新井太郎、山田巖雄、原勝、内藤三郎といった個人名が記載されるようになった点である。これは、「研究→実践」という研究会の 5 年間の実績で東京放童研としての脚色スタイル、脚色方針などが定着し、台本制作が協議制から脚色者の責任制に移行した、または 1934–1935 年の脚色時に中心的役割を果たした童話家の名を改めて明記したと推察できるが、研究会としてのありようが本質的に変化した可能性もある。

台本の存在が確認できたのは 1939 年までであったが、1940 年以降についても『NHK 確定番組』で追跡調査をしたところ、「東京放送童話研究会」名義で制作された番組は見当たらなかった。しかし、1940 年 1 月 21 日「偉人伝　或（ママ）る日の豊臣秀吉」、2 月 19 日「偉人伝　ある日の新井白石」、3 月「偉人伝　ある日の大村益次郎」、4 月 24 日「偉人伝　ある日の八幡太郎義家」、5 月 22 日「偉人伝　ある日の本居宣長」、6 月 24 日「偉人伝　ある日の徳川光圀」に東京放童研のメンバー名[26]が付された番組が確認できた。ここから、研究会は 1939 年付近で何らかの理由によって活動停止、あるいは解散という形で一区切りつけられたものと把握できる。

以上、東京放童研が制作した 1934 年から 1939 年の作品一覧をもとに同会の展開を概観した。そこで加えて押さえたいのは、活動の背景としての放送界、社会の 6 年間の動向である。

まず、子ども向け番組において注目される動きは、1935 年 4 月 15 日に放送 10 周年の記念事業のひとつとして全国向け学校放送が開始された点である。すでに 1933 年 9 月より JOBK 第二放送で学校放送が始まり、「大阪ローカルで計画的な教育放送を実施して得た実績」[27]があった。全国放送に先立ち、日本放送

表１　東京放送童話研究会による「子供の時間」枠内の放送童話一覧

放送年月日（放送回数）		童話題名	シリーズ名	脚色・原作者など	台本収蔵	台本頁数	配役表有無	その他
1934 年 昭和 9	1 月 19-21 日（3 回）	竹取物語	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 2 巻 1939 年版の台本は一部あり
	2 月 20-22 日（3 回）	ガリヴァ旅行記	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			1939 年版の台本あり
	3 月 17-18 日（2 回）	イソップ物語	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			
	4 月 18-21 日（4 回）	西遊記	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			
	5 月 22-24 日（3 回）	グリムの童話	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			
	6 月 17-20 日（4 回）	家なき子	名作物語	原作: 記載なし 脚色: 東京放童研	NHK	22 ＋ 23 ＋ 22 ＋ 22	一部あり 手書き	書籍第 1 巻
	7 月 15-17 日（3 回）	印度の童話	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			
	8 月 12-15 日（4 回）	アラディンの 不思議なランプ	名作物語	原作: 記載なし 脚色: 東京放童研	NHK	17 ＋ 15 ＋ 15 ＋ 19	一部あり 手書き	1939 年版の台本あり
	9 月 10-12 日（3 回）	アンデルセン	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			
	10 月 14-17 日（4 回）	黄金丸	名作物語	原作: 巌谷小波 脚色: 東京放童研	NHK	14 ＋ 16 ＋ 14 ＋ 16	なし	1939 年版の台本あり
	11 月 11-13 日（3 回）	イワンの馬鹿	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 1 巻
	12 月 16-18 日（3 回）	クリスマス・カロル	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 1 巻
1935 年 昭和 10	1 月 13-15 日（3 回）	弓張月	名作物語	原作: 記載なし 脚色: 東京放童研	NHK	22 ＋ 18 ＋18	なし	
	2 月 17-19 日（3 回）	ピノチオ	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			1939 年版の台本あり
	3 月 17-19 日（3 回）	宝島	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 2 巻 1939 年版の台本あり
	4 月 16-18 日（3 回）	小公子	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 2 巻
	5 月 9-10 日　（2 回）	隊商物語 ――カリフの鶴	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 3 巻、 1939 年の台本あり
	6 月 12-14 日（3 回）	アンクル・トムの 小屋	名作物語	原作: ストウ夫人 脚色: 東京放童研	NHK	15 ＋ 15 ＋17	なし	
	7 月 10-12 日（3 回）	東海道中膝栗毛	名作物語	原作: 記載なし 脚色: 東京放童研	NHK	14 ＋ 22 ＋22	あり 手書き	
	8 月 6-8 日　（3 回）	フランダースの犬	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 3 巻、 1939 年版の台本あり
	9 月 17-19 日（3 回）	法螺吹先生	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			書籍第 3 巻
	10 月 7-9 日（3 回）	国性爺合戦	名作物語	原作: 記載なし 脚色: 東京放童研	NHK	14 ＋ 15 ＋14	あり 手書き	書籍第 3 巻、 1939 年版の台本あり
	11 月 25-27 日（3 回）	黒馬物語	名作物語	原作: 記載なし 脚色: 東京放童研	NHK	17 ＋ 13 ＋14	あり 手書き	1939 年版の台本あり
	12 月 10-12 日（3 回）	青い鳥	名作物語	脚色: 東京放童研	なし			
1936 年 昭和 11	1 月 1-2 日（2 回）	出世太閤	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	2 月 12-13 日（2 回）	発明王トマス･エヂソン	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	3 月 9-10 日（2 回）	大村益次郎	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	4 月 7-8 日（2 回）	お釈迦様	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	5 月 13-14 日（2 回）	江戸太郎左衛門	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	6 月 8-9 日（2 回）	水戸光圀	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	7 月 11-12 日（2 回）	ジュリアス・シーザー	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	8 月 3-4 日（2 回）	吉田松陰	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	9 月 2-3 日（2 回）	伊藤博文	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	10 月 9-10 日（2 回）	孔子様	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	11 月 24-25 日（2 回）	鉄鋼王カーネギー	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	NHK	18＋19	あり 手書き	
	12 月 21-22 日（2 回）	イエス様	偉人物語	脚色・演出: 東京放童研	なし			
1937 年 昭和 12	1 月 19-20 日（2 回）	伊能忠敬	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	2 月 16-17 日（2 回）	中江藤樹	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	3 月 24-25 日（2 回）	徳川吉宗	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	4 月 21-22 日（2 回）	渋沢栄一	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	5 月 29-30 日（2 回）	東郷平八郎	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	6 月 7-8 日（2 回）	頼山陽	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	7 月 2-3 日（2 回）	野口英世	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			

	8 月 5-6 日（2 回）	伊達政宗	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	9 月 12-13 日（2 回）	乃木希典	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	10 月 8-9 日（2 回）	西郷隆盛	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	鹿児島 NHK	15+ 16	一部あり手書き	
	11 月 3-4 日（2 回）	児玉源太郎	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
	12 月 2-3 日（2 回）	木戸孝允	近世日本の英傑	脚色・演出: 東京放童研	なし			
1938 年 昭和 13	1 月 5-6 日（2 回）	八幡太郎義家	世界偉人伝 1	脚色: 東京放童研	大阪 NHK	14＋16	あり手書き	
	2 月 4-5 日（2 回）	ジョージ・ワシントン	世界偉人伝 2	脚色: 東京放童研	NHK	17＋16	あり手書き	
	2 月 18 日（1 回）	弾丸飛行機ひかり号	童話	出演: 北村大栄 作: 東京放童研	なし			
	3 月 14-15 日（2 回）	楠木正成	世界偉人伝 3	脚色: 東京放童研	大阪 NHK	14＋19	あり手書き	
	4 月 12-13 日（2 回）	ビスマーク	世界偉人伝 4	脚色: 東京放童研	大阪 NHK	16＋17	あり手書き	
	5 月 10-11 日（2 回）	豊臣秀吉	世界偉人伝 5	脚色: 東京放童研	大阪	20＋17	あり手書き	
	6 月 14-15 日（2 回）	アブラハム・リンカーン	世界偉人伝 6	脚色: 東京放童研	大阪	18＋20	あり手書き	
	7 月 18-19 日（2 回）	諸葛孔明	世界偉人伝 7	脚色: 東京放童研	大阪	15＋17	あり手書き	
	8 月 29-30 日（2 回）	レオナルド・ダ・ヴィンチ	世界偉人伝 8	脚色: 東京放童研	大阪	17＋14	有手書き	
	9 月 6-8 日（3 回）	西遊記	名作物語	作: 茂原茂雄 脚色: 東京放童研	なし			1934 年 4 月同作品放送
	9 月 22-23 日（2 回）	成吉思汗	世界偉人伝 9	脚色: 東京放童研	大阪	15＋14	あり印刷＋手書き	
	10 月 12-13 日（2 回）	コロンブス	世界偉人伝 10	脚色: 東京放童研	大阪	15＋15	あり印刷	
	11 月 16-17 日（2 回）	加藤清正	世界偉人伝	脚色: 東京放童研	なし			
	12 月 16-17 日（2 回）	北條時宗	世界偉人伝 12	脚色: 東京放童研	大阪	13＋14	あり印刷	
1939 年 昭和 14	1 月 9 日（1 回）	菅原道真公	世界偉人伝 13（『NHK 確定番組』では「日本の偉人」）	脚色: 東京放童研	大阪	17	あり印刷	
	1 月 29-30 日（2 回）	黄金丸	世界の名作から 1	脚色並演出: 東京放童研	NHK	20＋19	あり手書き	1934 年 10 月同作品放送
	2 月 7 日（1 回）	大山　巌	日本の偉人 2	脚色: 東京放童研	鹿児島 大阪	22	あり印刷	
	2 月 21-22 日（2 回）	ピノチオ	世界の名作から 2	脚色並演出: 東京放童研	大阪	15＋17	あり印刷	1935 年 2 月同作品放送
	3 月 24-25 日（2 回）	竹取物語	世界の名作から 3	脚色並演出: 東京放童研	NHK	13	あり印刷	1934 年 1 月同作品放送 台本は 1 冊のみ収蔵
	4 月 18-19 日（2 回）	ガリバー旅行記	世界の名作から 4	脚色並演出: 東京放童研	大阪 NHK	13＋20	あり印刷＋手書き	1934 年 2 月同作品放送
	5 月 16-17 日（2 回）	百合若物語	世界の名作から 5	脚色: 三村良輔	大阪	17＋20	あり印刷	
	6 月 13-14 日（2 回）	宝　島	世界の名作から 6	原作: スチブンソン 脚色: 三村良輔	大阪	17＋16	あり印刷＋手書き	1935 年 3 月同作品放送
	7 月 19-20 日（2 回）	黒馬物語	世界の名作から 7	原作: シウエル 脚色: 道明真治郎	大阪	17＋18	あり印刷＋手書き	1935 年 11 月同作品放送
	8 月 8-9 日（2 回）	フランダースの犬	世界の名作から 8	脚色: 新井太郎	大阪	20＋20	あり印刷	1935 年 8 月同作品放送
	9 月 22-23 日（2 回）	カリフの鶴	世界の名作から 9	脚色: 山田巌雄	大阪	14＋16	あり（別紙メモ）手書き	1935 年 5 月同作品放送
	10 月 12-13 日（2 回）	国性爺合戦	世界の名作から 10	脚色: 原　勝	大阪	14＋17	あり印刷	1935 年 10 月同作品放送
	11 月 24-25 日（2 回）	不思議なランプ	世界の名作から 11	脚色: 新井太郎	大阪	19＋20	あり印刷	1934 年 8 月同作品放送
	12 月 14-15 日（2 回）	少公女	世界の名作から 12	原作: バーネット夫人 脚色: 内藤三郎	大阪	17＋18	あり印刷＋手書き	

シリーズ名に付した数字は台本の記載
台本収蔵は「鹿児島」が鹿児島県立図書館、「NHK」は NHK 放送博物館、「大阪」は大阪府立中央図書館国際児童文学館
台本頁数は巻ごとの記載、1938-1939 年版は 1 頁あたり 27 字×13 行、約 450 字詰め

協会業務局長が「学校放送の開始に際して」として、ラジオは「児童に対する教師の授業を手助けし、之を完成させる点に於て大なる効果を挙げ得るもの」[28]とし、学校放送にふさわしい内容を 7 科目[29]ごとに項目化した。そこでは修身公民は「名士の講演や或は時々世間に知られる美事善行で修身上の訓話となるもの、或は天長節とか紀元節とか、大楠公の六百年祭とか、陸海軍記念日と云うような大切な日に、之に関する講話等を放送して児童の徳育に協力」、日本歴史は「教科書にある歴史上の人物や出来事を面白く話

し、或は之を童話劇に仕組んで放送し、興味の中に知らず識らず覚えさせるようにする」と説明された[30]。「子供の時間」は放送当初から帰宅した子どもの慰安、娯楽の番組であった。だが、そこに出演する童話家は、学校放送において「面白くてためになる童話を、児童達のあこがれている童話の先生例えば久留島先生とか岸辺先生とか、安倍先生、その他の先生に御願いして時々放送して戴くことになっております」[31]と期待された。その影響により「子供の時間」枠の名作選定でも「児童の徳育」が意識され、「歴史上の人物や出来事」を面白く話す試みがなされて偉人伝の企画が連続する流れになったと受けとめられる。

では、こうした放送界の動きを取りまく社会の動向はどうであったのか[32]。ラジオ放送開始 6 年後の 1931 年 9 月には満州事変が起こり、日本は戦時期に突入した。1935 年 11 月には文部省が教学刷新評議会を設置し、国体観念・日本精神を根本とする学問・教育の刷新が意図される。1936 年 11 月、日本はドイツとの防共協定に調印し、1937 年 7 月からは盧溝橋事件により中国との本格的な戦争が始まる。同年 9 月には国民精神総動員中央連盟が結成され、その要綱には文化の件も明示された。1938 年 4 月の国家総動員法公布、1939 年 7 月の国民徴用令公布と戦時体制が整えられていくなか、9 月にはヨーロッパで第二次世界大戦が勃発した。このように国家主義、軍国主義が社会の趨勢となる背景を考え合わせ、東京放童研の動向、子どもたちに提供された番組を考察する視点が求められよう。

では次に、東京放童研の構成メンバーとその属性、同会が脚色を手がけた台本の概要について述べる。

3　東京放送童話研究会につどったメンバーと台本の概要

(1) 東京放送童話研究会の構成メンバー

表 1 に記載した通り、東京放童研の放送童話台本では配役の記録が確認できた。配役は表紙をめくるとすぐの見返しにペンや鉛筆で書きつけられるか、表組で印刷されていた。表のなかには役名が印刷されているが配役名が空欄のものもあれば、印刷されているものもあった。あるいは、配役の別紙メモがはさみ込まれた台本もあった。いずれにせよ同会の研究は、話の最初から結末までをひとりで語る口演童話形式ではなく、複数で演じる劇形式を成果としていたと分かる。

関屋は『ラジオ世界名作物語』（清和書店、1935 年）序文で、表 2 の 33 人を事業の「同志」に挙げた。台本に記録された配役を確認すると、ひとりのメンバーが、ある作品においては語り手や主役級の登場者となり、また別の作品では兵士、家来、農民、町の人などの一、二、三といった端役として参加していた。メンバー以外が記載されている台本もあった。

表 2　東京放送童話研究会 1935 年 11 月時点における構成メンバー

足助　和夫	熱田　梅子	安部　梧堂	安倍　貞雄	安倍　季雄*	天野　雉彦* **	新井　太郎*
池谷　花子	内山　憲堂* **	小川　格*	小野　直*	風間又四郎	樫葉　勇*	金津　武夫
金津　正格*	岸辺　福雄**	北村　大栄**	小林寿一郎	佐田　至弘*	白倉　文伴*	鈴木篤三郎* **
大道　清子	田村　宗順*	原　勝*	深沢　一郎* **	細川　武子*	道明真治郎*	三村　良輔*
三輪　寿雄**	村岡　花子	矢野　泰助*	山田　巖雄**	吉原　鉄夫		

*は久留島主宰「回字会」参加者、**は岸辺主宰「喃々会」参加者（内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年および堀田穣「図書館におけるお話会の歴史（7）『日本口演童話史』人名総索引」『司書課程年報 2013』(14)、京都学園大学司書課程、2014 年により確認）

表 2 で確認できる通り、33 人の属性を調べると 14 人が久留島主宰の回字会関係者、岸辺を含めた 4 人が岸辺主宰の喃々会関係者で、4 人は両方に参加していた。二つの会はともに主宰者が口演童話の大家として知られていたため、口演の研究会として主流だった。両会との関わりが確認できないメンバーでも、たとえば熱田は樫葉主宰の童話教育会に原、白倉と参加していた[33]。また、口演童話には宗教童話の分野があり、内山[34]、北村、深沢、三輪、山田には仏教界、久留島も含め関屋、村岡にはキリスト教界のつな

がりがあった[35]。こうしたことから、東京放童研が既存の口演童話研究会の交流を基盤に構成されていたことが分かる。

本研究では、台本が残された 35 作品の配役記録ならびに『NHK 確定番組』により、1934–1935 年の 5 作品と 1939 年の 14 作品に関して出演者の登場作品数をデータ化した。1934–1935 年では 38 人、1939 年では 37 人が出演しており、そのうち登場数が多かった出演者を挙げると、1934–1935 年では小林寿一郎、深沢一郎が 5 作品、熱田梅子、池谷花子、内山憲堂、白倉文伴、原勝、三村良輔、三輪寿雄が 4 作品であった。1939 年では三村良輔が 11 作品、三輪寿雄、武藤教胤、山田巖雄が 10 作品、安部梧堂、原勝が 9 作品、北村大栄、深沢一郎、道明真治郎が 8 作品であった。1934–1935 年については量的に限られたデータだが、どちらの時期にも中心メンバー的であったのは原勝、深沢一郎、三村良輔、三輪寿雄である。

1939 年に 10 作品登場の武藤教胤は、表 2 には含まれていない。武藤の経歴は不詳だが、1936 年 11 月「偉人物語　鉄鋼王カーネギー」から 1939 年に至る台本には東京神田神保町「武藤謄印社」が印刷をしたと分かる奥付があり、武藤が同社の関係者だったとも考えられる。1939 年の台本には、表 2 にない名前がほかにも確認できる。たとえば 6 作品に出演した金沢嘉市である。金沢は小学校教師で 1931 年より回字会、1934 年より童話教育会に参加し、1938 年には教室童話研究会を教師仲間たちと結成して口演童話家としても注目されるようになった[36]。以上から、活動が展開していく 6 年間には多少のメンバー変動があったと分かるが、ここで、メンバー変動と前章で述べた東京放童研の 1939 年付近における活動停止状況との関連について、戦時下の国策協力という視点からの考察を加える。

1941 年 12 月、社団法人日本少国民文化協会（以下「少文協」）が設立され、口演童話の諸団体は他の児童文化団体とともに情報局の統制で一元化された。少文協の使命は、校外教育における少国民錬成であった。この国策遂行に当たり、「童話部会」として活動した口演童話団体はアジア・太平洋戦争が進行するにつれて中心的役割を果たすようになった[37]。同部会の幹事長はラジオ本放送の開始日に童話を語った久留島武彦で、庶務幹事は内山憲尚、原勝であった。連絡幹事の新井太郎、幹事の安部梧堂、金沢嘉市、三村良輔、参事の樫葉勇、鈴木篤三郎、関屋五十二、相談役の安倍季雄、天野雉彦、岸辺福雄と、童話部会役員 34 人のうち 12 人が東京放童研の旧メンバーであった[38]。少文協役員には 1934–1935 年、1939 年の両時期に東京放童研の中心的メンバーであった原勝、三村良輔が含まれている。しかし、同じく中心的であった深沢一郎、三輪寿雄は含まれていない。また、1939 年に番組の出演数が多かった北村大栄、道明真治郎、武藤教胤、三輪の実弟である山田巖雄もまた含まれていない。

先述のように北村、深沢、三輪、山田には仏教童話界のつながりがあった。その点に注目すると、東京放童研のなかで、1937 年 7 月の日中戦争、9 月の国民精神総動員体制開始あたりから顕著になってきたラジオ番組の戦時協力[39]をめぐって見解の違いが生じた可能性を一つ考えられる。たとえば、三輪、山田兄弟の実家は浅草専光寺で、ふたりは戦後、山田の自坊、港区高輪の魚籃寺を会場にした日本童話協会の恒例行事「童話関係者追悼会」の導師を務めた[40]。戦時にあっては戦死者の法要をおこなう立場の者が、兵士を志願する子どもを錬成する目的で武人や軍人の功績をたたえつづける活動に抵抗があったことは十分に考えられる。表 1 で確認できる通り、1937 年 8 月から 1939 年 2 月までの偉人伝の番組で取り上げられたのは、そのほとんどが武人、軍人であり、1938 年 2 月には東京放童研作で「弾丸飛行機ひかり号」という題の童話が放送されている。戦時下における「童話報国」と解釈できる番組がつづいているのである。

次節では、現存する東京放童研の台本について、その形式と旧蔵者の二つの面から説明する。

(2) 東京放送童話研究会の台本の概要

①劇形式的な演出の選択

前節で台本が劇形式であったと述べた。しかし台本には、演劇の脚本に一般的なト書きがない。物語が地の文として書かれ、発話部分に発話者が誰なのかが分かる登場者、もしくはその記号が明記されており[41]、会話や発話が多いものの書籍や雑誌に掲載される物語とほぼ同じ体裁となっている。「国性爺合戦」の 1935

年版台本と『ラジオ世界名作物語（三）』（清和書店、1935 年）所収版を比較したところ、出版に当たっては母親が息子のために自分の命を犠牲にする物語のヤマ場を中心に加筆があったが、台本部分はほぼそのまま生かされていた。劇形式的でありながら「読む童話」同様の読み物の体裁となっている点が、東京放童研の放送童話台本の特徴である。また、登場人物ごとに発話者を決めて劇のように複数で童話を演じる形式が演出の特徴である。

では、なぜ複数で取り組む劇形式的な手法が選ばれたのか。東京放童研につどったメンバーは表 2 で検討したとおり、回字会、喃々会で研鑽を積んだ童話家が多く、一人ひとりに講堂や公会堂、演舞場など広い会場で口演童話を提供できる力があった。それにもかかわらず複数で演じる選択をした理由を考えるとき、注目されるのは対象とされた名作物語という話材である。口演童話は本来、「主要人物は成可く一人がよい」、「人物の数が多くなる様な場合には、仕方がありませんから、其の中の二三の主要な人物だけを、特に強く述べて行って、其の他の人物は、影を薄くして述べる必要が起こってくる」[42]とされ、登場者数をしぼって話を組み立てる工夫がされていた。だが、名作物語は話が長尺で場面展開や登場者が多く、かならずしも口演童話向きとは言えない。それでも名作物語が研究の対象とされたことには、第 1 章で述べた通り、自称者をふくむ童話家たちが良質とは言えない話をラジオで披露した経緯があり、長年読みつがれてきた定評ある物語を番組で提供していきたい意思が研究会のメンバーに共有されていた点を指摘できる。劇形式的な演出は、ひとりで語る口演童話の技術的限界を超える手立てであったと言える。

②台本の旧蔵者

大阪府立中央図書館国際児童文学館収蔵の 22 作品については、台本の旧蔵者が、1939 年の出演回数が多かった山田巖雄[43]だと特定できた。表紙の多くに山田の署名があり、署名がない冊子についても、全巻をひもで綴じて保存した穴の跡が 2 箇所確認できた。また、A5 判の台本は上着のポケットに入れて持ち歩かれたのか、表紙にはタテに折られた跡が共通して残っていた。山田は出演作品で自らが話す部分にしるしをつけ、読み合わせや本番で表現が変わったり加除されたりしたであろう部分に書き込みを残している。そうした書き込みからは、より分かりやすく聞き取りやすい表現が検討されていたことがうかがえる。

また、山田旧蔵の台本は NHK 収蔵分にも一部含まれていることが署名により確認できた。NHK 収蔵分については山田旧蔵分のほかに複本があり、それらには「聴視係」と墨書の入った冊子、番組担当者である関屋の印が入った冊子などがあり、後者には台本校閲者として武藤ほかの印が押してある冊子も確認できた。これらは放送本番の記録用に残された台本がそのまま収蔵されたものと思われる。

次章では、台本のなかから具体的な事例を挙げ、東京放童研の脚色について検討する。

4　東京放送童話研究会の脚色台本の特徴

本研究の中心的課題は、1931 年結成の東京放童研の展開、制作実績など概要の把握である。したがって、調査対象とした 35 本の台本内容に関する詳しい検討は今後の課題に持ち越される。ここでは、台本から読み取られる教育的な要素を中心に口演童話家たちが制作した童話番組の特徴を挙げる。

一点めは聴取者に合わせたつくりかえで、これは口演童話の創始者である巖谷小波（1870–1933）以来の伝統と言える。ドイツ語に堪能であった巖谷は、たとえば「ヨーロッパの昔話の翻案を、読者にはそれと気付かせずに、日本の昔話と同様の語り口で発表」[44]ということがあった。著作権の概念がまだ一般的ではなかった時代であり、その場限りの語りである口演童話においては、聴衆に合わせたつくりかえは自然なことと受けとめられていたのであろう。そうした慣習にならった台本のつくりかえはまず、下記の 1939 年 12 月「少公女」にうかがえる。

> これは「少公子」の作者、フランセス・バーネットと云う小母さんの書いた物語ですが、外国のお話なのでこの中には難しい名前が沢山出てまいります。そこで放送では判り易い様に人の名前だけは

皆日本の名前に代えてお話し致します[45]。

この断りのあと、「静子のお父様は呉頼三と云ってイギリス陸軍の大尉」、「見つけたのは三井女塾と云う小さな学校」[46]といった紹介をまじえて物語は進む。こうした名称変更のほか、1938 年 2 月「ジョージ・ワシントン」では学校の先生が「ホラホラこれを見なさい、これはジョージのお習字だぞ！　綺麗じゃろう」[47]と「習字」作品をほめ、1939 年 6 月「宝島」では「衣服を入れる大きな行李」[48]という表現がされるなど、聴取者である子どもたちに身近なことばが選択されている。

以上の例は、子どもたちを物語世界にスムースに導入する工夫で教育的配慮と言え、原作が伝えようとした主題に直接影響をおよぼすものではない。しかし、原作の主題に関わると考えられる物語のつくりかえ例もある。1935 年 8 月放送「フランダースの犬」書籍化作品[49]、1939 年 8 月放送台本「フランダースの犬」では、ネルロ少年とパトラッシュがルーベンスの名画の前で亡くなる原作の結末が変えられている[50]。ネルロの友人アロアの父親がパトラッシュに案内されていくと、ネルロはルーベンスの絵のある「お寺」の階段で倒れており、介抱されて一命をとりとめる。その晩、アロアの父親がネルロを養子にすると人びとに披露し、ネルロの絵が展覧会で一等賞になったことが宴席で祝われる。また、1935 年 3 月放送「宝島」書籍化作品[51]、1939 年 6 月放送台本「宝島」では、片脚を失った男シルヴァが船から逃亡してゆくえ知れずになるのではなく、イギリスに帰国後は謀反罪で死刑にされるべく檻に入れられているところ、ジム少年の命乞いでみなに許される流れに変えられている。「子供の時間」が午後 6 時からの家族のつどう時間帯の放送であるため悲劇的な結末が避けられ、苦労や努力が報われること、他者に温情をかける大切さなどが子どもたちに強調される内容になったと推察できる。

特徴の二点めは、番組を通して学ぶことが表明されている点である。事例を 1935 年 11 月「黒馬物語」、1938 年 4 月「ビスマーク」から挙げる。

> 若し皆様がこれからお話するお話を静かにお聴き下されば、必ず皆様、日本の少年少女の方々は、この私のお話の終る三日の後には、生き物はどういう風に扱ったらいいかと云う事がハッキリお判りになる様になることだと思います[52]。

> ビスマークの大人になってからのくわしいお話はこれから皆様がいろいろな書物でお読みになることと思いますが、今私共の一番仲良しの国である今日のドイツを生んだ大偉人ビスマークの名を何卒いつまでも覚えていて頂きたいと思うのです[53]。

こうした語りからは、子どもの周囲でラジオを聞く大人たちに番組の教育的意義を伝える意図が伝わってくる。当時はまだ、ラジオの提供する教育、教養は一般大衆が対象だと受けとめられ、1935 年から全国放送が開始された学校放送は、教師中心の教育を重視する文部省の教権護持により教育現場でなかなか利用の進まない状況にあった[54]。放送局には、ラジオの子ども向け番組が慰安、娯楽にとどまらず教育に役立つ内容であることを周知する必要があったのである。

特徴の三点めは、物語中の教訓的な言説である。注目される訓えは君主・天子への忠義、親への忠孝、国を誇る気持ち、誠実さなどで、それぞれを 1938 年 3 月「楠木正成」、1938 年 6 月「アブラハム・リンカーン」、1938 年 12 月「北條時宗」、1939 年 8 月「フランダースの犬」から下記の通り確認できる。

> 正成は最後まで天子様の御為めに戦い、いよいよ最後と覚悟をすると一子正行を桜井の駅に呼び寄せて自分亡き後の心得をさとし、湊川で弟正季とさしちがえて死ぬ前には「七度生れ変って朝敵を亡ぼそう！」と叫んだのです。正成公のこの忠義な心はその後私共の先祖の心の中に七度も十度も生れ変って現われました。今も私共の心の中に生きて「私に負けない様な忠義な日本人におなりなさい」

と教えているのです[55]。

僕は決心している。僕は軍人として死ぬ覚悟をしているんだ。しかも君は母一人子一人の身の上だ。君のお母様のためにもそんなことをするのは思い止まってくれ給え！[56]

「おお大王様、それは日本でございます。国は小そうございますが、どうして仲々立派な国ときいております！」[57]

お前は、よいことを言った。貧乏をしていても、正しく真直ぐに生きてゆけば、ちっとも恥しいことはない。わしたちは貧乏だけれど、正しく生きて来た。左様だ。貧乏は恥ではない。貧乏は決して恥しいことではないぞ[58]。

以上の教訓的な言説については年代による変遷、名作物語と偉人伝の比較などを考慮しつつ、国家主義、軍国主義へと傾いていった社会の動向との関連を改めて分析していく必要があろう。ここではさしあたり、時代や社会が求める修身的な要素を伝え教える徳育に放送童話が効果の期待できるメディアであったことを確認するに留める。

5　おわりに

「口演童話の本質は、興味を中心とし、情操を主軸としてその内容の伝達をはかりつつ、子どもたちの情操の陶冶をはかり、子どもたちの心性の健全なる発達を期するものといえる」[59]と説明されるように、口演童話は子どもたちの心の育ちを意図したところで発達、展開した教育的な児童文化である。それがアジア・太平洋戦争下にあっては国策の伝達、普及に都合のよいメディアとして利用され、戦争協力に力を発揮したことは複数の研究によってすでに論じられてきた[60]。

本研究では東京放送童話研究会の活動を例に取り、ラジオという新たなメディアに進出した口演童話家たちが楽しみながら学べる放送童話のありようを協同作業で検討したこと、同会が形式や技術を蓄積した研究の展開、制作実績などを明らかにした。その蓄積は同会設立の 1931 年から、活動停止に至ったと推測される 1939 年までにおこなわれ、1937 年付近からは活動が戦時協力に転化していく様子がうかがえた。

放送童話は、東京放童研の貢献によって子どもたちへの教育的な要素の伝達技術が高められ、一つの型の確立を見たと言える。今後は、ここで十分に掘り下げられなかった台本に含まれる要素の検討をおこなったうえで、同会の活動期のあと、戦時下のラジオにおいて放送童話が国策協力にどのように活用されたかという点に注目し、実証的な考究に取り組みたい。

注

[1] 日本初のラジオ放送は 1925 年 3 月 22 日、東京芝浦の東京放送局仮放送所から JOAK のコールサインで試験放送として実施された。JOBK（大阪放送局）は 6 月 1 日、JOCK（名古屋放送局）は 7 月 15 日が初放送（西本三十二『放送 50 年外史 上巻』日本放送教育協会、1976 年、103-104 頁）。

[2] 『童話 久留島名話集』（東洋図書、1934 年）に所収され、『久留島武彦資料集 第二巻』（大分県教育委員会、2001 年）に再録された「寿命の分配」と同じ内容だと推察される。

[3] 1960 年代に入って作成されたと考えられる小冊子で放送史研究の限られた基礎資料であるが、1930 年ごろまでの番組表の検証では、実際の放送内容が記載された情報通りとは限らない（宮川大介「放送草創期の番組表を読み解く（1）何が記録されているか」NHK 放送文化研究所編『放送研究と調査』66(11) 、2016 年、74-77 頁）。

[4] 放送開始当日は 9: 00 より天気予報、奏楽「君ケ代」、後藤新平の挨拶、吹奏楽、午後から謡曲、ラジオ劇「桐一葉」、管弦楽、童話が放送され、夜も番組があった。

[5] 秋山正美編著『ラジオが語る子どもたちの昭和史 I 』、大空社、1992 年、4 頁

[6] 秋山、同上書、1992 年、4 頁

[7] 内山憲尚「口演童話」滑川道夫・菅忠道編『近代日本の児童文化』新評論、1972 年、164 頁

[8] 岡本光弘「お話・ストーリーテリング」滑川道夫・中川正文編『児童文化』東京書籍、1975 年、55 頁

[9] 滑川道夫『日本児童文学の軌跡』理論社、1988 年、28 頁

[10] 関屋五十二「序文」『ラジオ世界名作物語（一）』清和書店、1935 年、1 頁

[11] 東京放童研の発足から出版企画に至る経緯は、関屋、同上、1935 年、1-3 頁を参考とした。

[12] 石島菊枝「初期の児童番組」日本放送作家協会児童文化部会編著『放送児童文化論』黎明書房、1964 年、72-73 頁

[13] 川上春男「関屋五十二」日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、1988 年、428 頁

[14] 関屋、前掲、1935 年、2 頁

[15] 秋山、前掲書、1992 年、11 頁、岩崎真理子「関屋五十二」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典　第 1 巻』大日本図書、1993 年、406 頁、川上、前掲、1988 年、428 頁など。

[16] 秋山、前掲書、1992 年、同書については後述する。

[17] 現存が確認できた童話台本は鹿児島県立図書館（以下「鹿児島」）収蔵の 2 作品、NHK 放送博物館（以下「NHK」）収蔵の 17 作品、大阪府立中央図書館国際児童文学館（以下「大阪」）収蔵の 22 作品で、「大山巖（日本の偉人）」（1939 年）は鹿児島・大阪の 2 館、「西郷隆盛（近世日本の英傑）」（1937 年）は鹿児島・NHK の 2 館に収蔵。「八幡太郎義家（世界偉人伝）」、「楠木正成（世界偉人伝）」、「ビスマーク（世界偉人伝）」、「ガリバー旅行記（世界の名作から）」は NHK・大阪の 2 館に収蔵。

[18] JOBK では当時、西本三十二（1899–1988）が奈良女子高等師範学校から招かれて学校放送の編成に当たっていた。西本はコロンビア大学でデューイ、キルパトリックの薫陶を受けた教育学者（西本、前掲書、1976 年、22 頁、119 頁）。JOAK に先んじて JOBK で計画的な教育放送が開始された背景には、「全国的な学校放送の誕生に大きな役割をはたした」 とされる西本の存在があった（鈴木博「全国向け学校放送の開始」日本放送協会編『学校放送 25 年の歩み』日本放送教育協会、1960 年、63 頁）。

[19] 冨田博之「足立勤のこと」『日本児童演劇史』東京書籍、1986 年、238-242 頁、畠山兆子編『足立勤児童文化論集』*関西児童文化史叢書 3*、関西児童文化史研究会、1989 年など。

[20] 畠山兆子「足立勤の生涯と仕事」畠山兆子編『足立勤児童文化論集』*関西児童文化史叢書 3*、関西児童文化史研究会、1989 年、99-116 頁

[21] 1928 年 11 月号の創刊から 1929 年 3 月号までは『コドモのテキスト JOAK』、1929 年 4 月号からは『コドモのテキスト』、1933 年 4 月号からは『ラジオ子供のテキスト』と表記された（秋山、前掲書、1992 年、16-21 頁）。テキストには「子供の時間」の主要番組が取り上げられた。

[22] 秋山正美「刊行のことば」『ラジオが語る子どもたちの昭和史 販売用リーフレット』大空社、発行年不詳

[23] 東京放童研は童話家中心の団体であるが、『ラジオ子供のテキスト』には JOAK 唱歌隊、BK コドモサークル、小樽どんぐり会、HK こども会、FK コドモ・サークルなど、各地の放送局を拠点に活動する子どもの団体が「ラジオのお友達」として写真で紹介されている。

[24] 『NHK 確定番組』を年次ごとに調査していくと、JOAK では 1935 年から開始の学校放送においても東京放童研が制作協力をしていた例があったが、今回の整理は「子供の時間」枠内の制作に限った。

[25] 1934 年 1 月 19 日には樫葉勇「竹取物語とは」、同年 3 月 17 日には村岡花子「イソップ物語を書いた人」、7 月 15 日には話者不明「印度の童話に就いて」といった解説が『NHK 確定番組』で確認できる。

[26] 東京放童研のメンバーについては後述する。

[27] 鈴木、前掲、1960 年、55 頁

[28] 中山龍次「学校放送の開始に際して」『放送』5(5)、日本放送出版協会、1935 年、6 頁
[29] 修身公民、読方、地理、日本歴史、理科、唱歌、体操。
[30] 中山、前掲、1935 年、7 頁
[31] 中山、前掲、1935 年、5 頁
[32] 以降の国家主義、軍国主義化の進展については、伊ケ崎暁生・松島栄一編著『日本教育史年表』三省堂、1990 年、128-145 頁を参考にした。
[33] 千野唯雄「樫葉勇」内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年、81 頁
[34] 内山は幼名「一三夫」で川柳の雅号「憲堂」を用いていたが、1939 年 4 月に「憲尚」と改名。得度も同年だが、寺院を構えるためではなく人間性を磨く目的であった（伊東挙位「内山憲尚」内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年、71 頁）
[35] 山田巖雄「仏教界」内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年、345-346 頁、古田誠一郎「キリスト教界」内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年、349 頁
[36] 中村美和子「教育界における口演童話の受容: 教師による久留島武彦の実演記録を例として」『人間文化創成科学論叢』21、2018 年、185 頁
[37] 中村美和子「戦時下の口演童話に見られる国策協力の検討: 金沢嘉市による防空教育の話材を事例として」『人間文化創成科学論叢』20、2017 年、162 頁
[38] 社団法人日本少国民文化協会「役員名簿」滑川道夫監修『少国民文化　第八巻「資料編」（社団法人日本少国民文化協会関係資料）』エムティ出版、［1942］1991 年、15-17 頁
[39] たとえば『NHK 確定番組』によると、1937 年 10 月 13 日から一週間は「国民精神総動員強調週間」として「戦局生活の日」、「出勤兵士への感謝の日」、「非常時経済の日」、「銃後の日」、「神社参拝殉国勇士を讃える日」、「勤労報国の日」、「非常時心身鍛錬の日」と毎日のテーマが設定され、番組が編成された。
[40] 内山憲尚・内山正憲「日本童話協会」内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年、96 頁
[41] 一例として 1935 年 10 月「国性爺合戦」で和藤内が「和」、「子供一」が「子一」と記載されている。
[42] 大塚講話会『実演お話集　第九巻』隆文館、1926 年、128-129 頁
[43] 1901 年生まれ、没年不詳。1949 年に自坊の魚籃寺に幼稚園を開く（内山憲尚・正憲「日本童話協会」内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、1972 年、96 頁）
[44] 櫻井美紀「口演童話から語り手運動まで」『口承文芸 2・アイヌ文学』*岩波講座日本文学史 17*、岩波書店、99 頁
[45] ［謄写版印刷］バーネット夫人原作、内藤三郎脚色『少公女［台本］1（世界の名作から）』1939 年、2 頁（収蔵: 大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N390221/1-12-1）
[46] 内藤、同上、1939 年、2-3 頁
[47] ［謄写版印刷］東京放送童話研究会脚色『ジョージ・ワシントン（1）』*世界偉人伝 2*、1938 年、11 頁（収蔵: NHK 放送博物館、所蔵番号: 0920000456）
[48] ［謄写版印刷］スチブンソン原作、三村良輔脚色『宝島［台本］1（世界の名作から）』1939 年、2 頁（収蔵: 大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N390221/1-6-1）
[49] 東京放送童話研究会編『ラジオ世界名作物語（三）』清和書店、1935 年、69-122 頁
[50] 雑誌『少年倶楽部』での連載がまとめられて出版された、宇野浩二の『フランダースの犬』翻案『花の首輪』（大日本雄弁会講談社、1931 年）が日本で初めてのハッピーエンド（野坂悦子「解説」アン・ヴァン・ディーンデレン、ディディエ・ヴォルカールト編著、塩崎香織訳『誰がネロとパトラッシュを殺すのか――日本人が知らないフランダースの犬』、岩波書店、2015 年、188-189 頁）。だが、それより先、ヴィクター・シャーツィンガー監督のアメリカ映画 A Boy of Flanders（1924 年）が日本で 1925 年に封切られ、ネロとパトラッシュが巨匠画家に引き取られる結末となっていた（Diendеren, A. and Volckaert, D., 2010, *A Dog of Flanders*, Tielt: Uitgeverij Lannoo nv. ［= アン・ヴァン・ディーンデレン、ディディエ・ヴォルカールト編著、塩崎香織訳『誰がネロとパトラッシュを殺すのか――日本人が知

らないフランダースの犬』岩波書店、2015 年、39-42 頁］）

[51] 東京放送童話研究会編『ラジオ世界名作物語（二）』清和書店、1935 年、161-223 頁

[52]［謄写版印刷］東京放送童話研究会脚色『黒馬物語（1）』*名作物語*、1935 年、1 頁（収蔵: NHK 放送博物館、所蔵番号: 0920000316）

[53]［謄写版印刷］東京放送童話研究会脚色『ビスマーク（2）』*世界偉人伝 4*、1938 年、16-17 頁（収蔵: NHK 放送博物館、所蔵番号: 0920000499、大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N380105/2-4-2）

[54] 鈴木、前掲、1960 年、55-58 頁

[55]［謄写版印刷］東京放送童話研究会脚色『楠木正成（2）』*世界偉人伝 3*、1938 年、18-19 頁（収蔵: NHK 放送博物館、所蔵番号: 0920000474、大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N380105/2-3-2）

[56]［謄写版印刷］東京放送童話研究会脚色『アブラハム・リンカーン［台本］2（世界偉人伝）』1938 年、13 頁（収蔵: 大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N380105/2-6-2）

[57]［謄写版印刷］東京放送童話研究会脚色『北條時宗［台本］2（世界偉人伝）』1938 年、4 頁（収蔵: 大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N380105/2-12-2）

[58]［謄写版印刷］新井太郎脚色『フランダースの犬［台本］1（世界の名作から）』1939 年、3 頁（収蔵: 大阪府立中央図書館国際児童文学館、資料請求番号: N390221/1-8-1）

[59] 松葉重庸『児童文化』白眉学芸社、1968 年、119 頁

[60] 上地ちづ子「口演童話の思想と方法」日本児童文学学会編『児童文学の思想史・社会史』*研究＝日本の児童文学 2*、東京書籍、1997 年、189-190 頁、中村、前掲、2017 年、162 頁など

謝辞

資料の閲覧に便宜を図ってくださいました NHK 放送博物館、大阪府立中央図書館国際児童文学館に心より御礼申し上げます。

付記

本研究はお茶の水女子大学大学院博士後期課程研究奨励賞の助成（2016–2018 年度）による成果である。